

光沢が保たれた。これはヨウ素により、ヨウ化銀が生成され、また Au は溶解したためと推察される。Pd の含有により、ヨウ素からの影響は小さくすることができるかと推察される。

13) 一平成26年度 慶熙大学国際交流報告一

○松葉 雅俊¹, 佐藤 知哉¹, 吉武 宜明¹, 鎌田 聡仁¹
酒井祐佳子¹, 高木聖四郎², 箱崎 竜治², 山崎 信也²
齋藤 高弘³, 大野 敬³

(奥羽大学・歯・第5学年¹, 奥羽大学・歯・第4学年²,
奥羽大学・歯・口腔外科³, 奥羽大学・歯・口腔衛生⁴)

本年8月3～10日の日程で国際交流委員長 山崎信也教授引率の元、4年生2名、5年生5名、計7名で行った慶熙大学での国際交流についての報告を行った。

今回の国際交流では慶熙大学附属病院での見学と講義、インプラント製造工場見学および河東病院での研修を行った。臨床研修の他、キャンパスツアーをはじめ食事会や市内観光で両国学生間の交流を行った。慶熙大学付属病院と河東病院では各診療科の臨床研修と講義を受けた。学生同士で光学印象と光学式蝕蝕検知器の相互実習を行った。インプラント製造工場ではインプラント体の製造過程のほか、3Dプリンタを使用した治療用器具の開発現場の見学と人工骨(オステオンII)の臨床応用についての特別講義を受けた。臨床研修以外では慶熙大学の学生によるキャンパスツアーや市内観光を通じて韓国の文化を知ることができた。

国際交流を通じて学んだことをまとめる。

1つは英語の重要性である。韓国では海外から治療を受けにくる人が多く、そのときの会話は英語が中心である。先生方はもちろんのこと慶熙大学の学生は英語が堪能であった。我々も臨床の場で、海外の患者と接する機会が出てくると思われる。そのため英語は重要である。

2つ目は最先端技術の臨床応用と東洋医学の応用である。3Dプリンタを使った治療用器具の臨床応用がすでに始められている。その一方で針治療や生薬などの東洋医学も取り入れており医療の幅が広い。

3つ目は積極的な姿勢である。研修に同行していた慶熙大学の学生から日本での治療法や使って

いる歯科材料など数多くの質問があった。彼らは歯科医療に対する姿勢がとても積極的で我々も見習うべき点だと感じた。

日本国内においても他大学へ行って勉強する機会は減多になく、我々にとって貴重かつ有意義な体験となった。今後の勉学においては国際交流の経験を活かしていく所存である。

14) 前歯の不良なガイドが原因で臼歯部の慢性歯周炎が増悪した症例に対する全顎的歯周治療

○羽鳥 智也, 山本 雄介, 川西 章
森 慎一郎, 高橋 慶壮
(奥羽大・歯・歯科保存)

【緒言】不良なアンテリアガイドは臼歯部への咬合性外傷を増悪させる因子になる。臼歯部の歯周組織破壊が進行した慢性歯周炎患者に対し、犬歯誘導を回復し、全顎的な歯周治療を行った症例の詳細を報告する。

【症例概要】

患者：62歳の男性 初診日：2009年3月11日、歯周病の治療を希望し来院、診査の結果、下顎左側臼歯部の歯列不正、上下顎前歯部の咬耗を認めた。全顎的に歯肉の発赤・腫脹は顕著ではないが臼歯部に限局した深い歯周ポケットが認められた。

診断：局所的な歯周組織破壊を伴う中等度慢性歯周炎

治療方針：1) 患者教育 2) 歯周基本治療(犬歯誘導の回復と咬合力の制御) 3) 再評価 4) 歯周外科治療 5) 再評価 6) SPT

治療経過：歯周基本治療による炎症のコントロールに加えて犬歯尖頭にレジンを追加して犬歯誘導を回復した。歯周基本治療後に再評価を行い上顎左側・下顎両側臼歯部にエムドゲインRを用いた歯周組織再生療法ならびに下顎両側臼歯部に遊離歯肉移植術を実施した。現在は病状も安定し2ヵ月に1回のSPTを継続している。

【考察】本症例では不良なプラークコントロールに加えて犬歯の咬耗によって犬歯誘導からグループファンクションに移行したことで臼歯部の歯周炎が増悪したと考えられた。犬歯の歯周組織破壊は見られなかったため、犬歯の咬耗部にコン

ポジトレジンを追加し、臼歯部を暫間固定して外傷性咬合の軽減を図った後、歯周治療を実施した。ブラキシズムの対処としてナイトプレートを使用させている。今後も咬合管理を含めたSPTを継続していく予定である。犬歯誘導とグループファンクションの選択については未だ統一見解はない。今回の症例においては犬歯の咬耗によりグループファンクションに移行し、加えて犬歯の骨吸収がほとんど見られなかったため、レジンを追加し犬歯誘導を回復させた。一方、犬歯の歯周炎が進行している場合にはグループファンクションを選択するのが妥当であろう。

【結語】不良な犬歯誘導がリスク因子として関わり臼歯部の慢性歯周炎が増悪した症例の診断および治療経過の詳細を報告した。

15) 奥羽大学歯学部附属病院における最近の初診患者の動向

○清野 晃孝, 小松 泰典, 渡邊 崇
成田 知史, 保田 穰, 杉田 俊博

(奥羽大・歯・附属病院)

【目的】奥羽大学歯学部附属病院は、歯科医療に求められる、安全で安心な医療サービスの充実に心がけており、ニーズの多様化に対応すべく各種専門外来を設け、地域医療機関からは、検査および特殊な疾患の治療などの依頼を受けている。

そこで、本院の現況を再認識すべく、震災から3年を経過した今、初診患者の動向について調査したので報告した。

【調査方法】対象は平成26年7月1日から9月30日までの3か月において予診科に来院した初診患者の中で同意の得られた221名である。

アンケート調査項目は、性別、年齢、職業、住所、主訴、交通手段、当院選択理由の7項目とした。

【結果および考察】

1. 女性がわずかに多く、54%を占めた。
2. 年代別では、30代から60代が多く、それぞれ18%程度であった。
3. 職業は男女ともに会社員が30%前後を占めた。
4. 住所は60%が郡山市内であり、他の地域はわずかであった。

5. 主訴は歯痛が最も多く、他は15%以下であった。

6. 当院を選択した理由は、家族・知人からの紹介が35%を占め大学病院であることも要因であり、他院からの紹介は6%にとどまることが示された。

今回の対象者は、他院からの診療情報提供1において口腔外科を紹介先に行っている場合および中学生までの子供は除かれており、ほぼ総合歯科の患者が該当したといえる。そこで年齢が高齢者のみならず、30、40代が多かったことが示された。そのため、住所は郡山市を中心とした地域が大半であり、交通手段は自家用車がほとんどであった。また主訴は歯痛が多く、口腔外科系の疾患は他院からの紹介が多いことが推察され、当院を選択した理由として、家族、知人の紹介や以前に通院した経験が多く示されたことは、大学病院としての信頼性はあるが、奥羽大学だからとの「評判」にまでは至っていないことが示された。

16) 総合歯科における歯科診療特別対応の流れ

○佐々木重夫, 永田 裕紀, 清野 晃孝, 佐藤 穂子
菊井 徹哉, 伊藤 歩, 雨宮 幹樹, 中條 雅人
山本 雄介, 渡邊 崇, 高橋 範之, 佐藤 光一
宗像 佑弥, 鈴木 翔, 杉田 俊博

(奥羽大・総合歯科・歯科診療特別対応グループ)

【目的】本学歯学部附属病院は福島県における歯科医療の第三次医療機関として障害者の歯科診療を行っているが、障害者の歯科治療に特化した講座や教室は存在していない。そこで、平成11年(1999年)に附属病院障害児・者歯科診療担当者連絡会を発足し、障害者に対しては保存系・補綴系の歯科医師が中心のチーム診療として対応している。これまでに担当チーム数や担当歯科医師の入れ替わりなど変化も多く、平成24年4月からは名称も障害者診療グループから歯科診療特別対応・口腔機能維持管理グループへ変更になった。今回は障害者の歯科治療に対応している本学のチーム診療を把握する目的で、現時点における利点と問題点ならびに解決策について報告する。

【方法】本院に初診来院する障害者は保護者・付添者や看護者が独自で来院してきた者の他に患